

ターに乗りたがったり、日曜日はごろごろとほとんど動かず一日を費やしてしまう、自分のなかの“ぐうたら”部分を捨てていきたいものだと思う今日この頃です。日光を浴びて犬の散歩をしたり、万年汚い床のふき掃除ぐらいから初めてみようかとも思います。また、二十一世紀を担うこれ

からの子ども達には、地球上の、動く動物の一員として、できるだけ体を動かして元気な“骨の太い”大人になって欲しいものです。

(日産厚生会玉川病院整形外科)

## 動くことを支えるもの

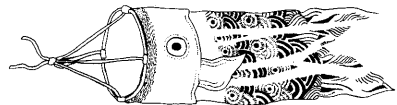
新山 裕之

やってみる

頭で考えることも大事だが、考えたことを自分

の体で実現すること、すなわち実際に行動に移すことはきっとその十倍大事だ。

いくら良いアイデアでも、それは形にしなけれ



ば「絵に描いた餅」。実際に自分が動かなければ、具体的には何も生まれない。うまくいくかどうかは分からない、失敗もあるかも知れないが、それを恐れていては前に進めない。やってみることが大事だ。

毎年楽しみに見ている番組に「ロボット・コンテスト」がある。高校生や高専生などがロボットを使った課題に挑戦する。数人のチームでアイデアを出し合い、それを形にしていける。発想はおもしろいが、実際に作ってみると思うようにいかないことが多い。不具合があちこち見つかり、なぜだろうと頭を寄せ合う。工夫を凝らし、何度もやり直していく姿が頼もしい。まさに試行錯誤の連続だ。

### 失敗を恐れる子どもたち

そんな番組を見ながら、思い浮かぶのが、最近の子どもたちの失敗を恐れる姿だ。

子どもはおもしろそうと思ったら後先を考えずにやってみるのが本来の姿のように思うのだが……。本当はやってみたいのに「僕はいいよ」と尻込みしたり、できないから、やったことがないからとやらないことが多い。何でもないようなことでも、回りの目を気にする子が増えているような気がする。

そういう子どもたちを見ると、母親が子どもへの行動の先回りする姿が後ろに見える。幸いなことに私の身近には、小さい頃から親の愛情を注がれて育てられている子が多い。ただ、その愛情のかけ方は無意識のうちに、過干渉になったり、過剰な期待になったりすることがある。その期待に応えなければいけないという気持ちが強くと、どこか心や動きに硬さがある子が少なくない。

### 子を思う故に

子どもが歩き始め、友達を求める頃になると母

親は、我が子（実は母親自身）が他の子ども（母親）とうまく付き合えるかどうかが気になるようだ。例えば、子どもが他の子のおもちゃを取ろうとすると、すぐさま「いけません」とたしなめる。そのうち、取りに行こうとする気配を見た途端にその行動を止めさせようとして先手を打つ。すると、子どもはだんだんと親の枠の中でしか動けなくなる。これでいいのかどうかをいつも母親の判断に委ねるようになる。次第に親の評価を気にするようになるのは自然の成り行きだ。

### 心をほぐす

そういう子どもは幼稚園に入ると、母から離れどう動いていいか判断できず、動けなくなったりすることもあつた。概して新しい環境に慣れるのに時間がかかる。それが悪いと言うのではない。母親に悪意などない、愛情を注いでいるのだ。むしろ、子どもたちにも罪はない。

そこで、私にできることは、かわいい子どもたちや一生懸命子育てをしようとしている母親の凝りをほぐしてあげることだ。本来もっている子どもらしい積極性を引き出してあげたい。結果だけでなく過程を楽しみむ心の持ちようを知らせてあげたい。

何といつても、それは幼稚園生活だけでなく人生を楽しむコツだから。それができると何をするにも楽になる。楽になると子どもたちの表情は柔らかくなる。いつもそんな表情の子どもたちと接していたい。心からそう思う。

### 寄り道をしよう・過程を楽しもう

子どもは大人のように器用ではないし、目的をもたずすることも多いから、何をするにもあちこち寄り道し、真っ直ぐには進まない。それでいい。その過程を飛び越して何かができるようになるのはかえって味気ない。その過程で得るもの

方が大事なこともたくさんある。人や物とかかわり合い、ぶつかり合い、思うようにならないこともある。逆に、やってみたらおもしろかった、一緒にできてうれしかったという気持ちも必ず味わえる。

### 安心して動けるように

心が凝っている子どもたちと接するとき、特に時間をかける。

飾らなくていいんだよ。無理して良い子にならなくてもいいんだよ。ということをいろんな場面で実感させていく。そのために、私も素の自分をさらす。

失敗しない人間はいない。間違えない人間もない。だから、うまくやろうとするよりも、困ったときに困ったと言えるようにすることが大事だ。できないときにはできない、教えて、手伝つたと素直に言える雰囲気や環境を作つてやること

が私の仕事になる。

### 動くためのエネルギー

人は動くときに、エネルギーが必要だ。それは自分の体の中にある。でも、半分だけ。残りのエネルギーは、回りの人からもらっているように思う。

幸いなことに私はここ数年、周囲の理解に支えられ、応援してもらい楽しく仕事をさせてもらっている。新しいアイデアを提案したときに、きちんと受け止めてもらえている。できるかな？ 動き出せるかな？ と思案しているときに、「それ、いいんじゃない！ やつてみようよ」と言ってもらうだけでエネルギーは満タンになり、動き始められることが多い。

失敗を恐れず、挑戦してみよう。結果だけに捕らわれず、過程を楽しもう。

子どもたちに訴え続けてきたことは、実は母親  
や私自身に対してのメッセージなのだ。

(港区立にしのはし幼稚園)

# サイバーワールドを 動かす子どもたち

藤代 一成

グローバル・インフォメーション・インフラ  
ストラクチャーいわゆるインターネットや電子メ  
ディアを中心とした地球規模の情報通信ネット  
ワークの出現で、地球のジオメトリーは容赦なく  
歪み、夜という概念がなくなりました。改めて考

えてみると凄いいことですが、隣の実験室でキ  
ーボードを叩いている学生さんだけでなく、例  
えばアリゾナ州立大学にいる友人の教官とも、体  
感的には同じ速度で電子メールを交換することが  
できます。また、先週先方で行った自らの講演のサ

